

空海と辺地修行

—入唐前の空海—

寺内 浩 (愛媛大学名誉教授)

Kūkai and Training in Remote Places: Kūkai Before Going to China Hiroshi Terauchi, Professor Emeritus, Ehime University

Examining the obituary biographies of monks (articles containing individuals' career records) in the *Nihon Kōki*, the *Shoku Nihon Kōki*, and the *Nihon Montoku Tennō Jitsuroku* reveals that only Kūkai lacks any mention of his mentor priest or the names of the temples where he trained. This suggests that before traveling to China, Kūkai did not study under a particular monk or dedicate himself to learning at a specific temple.

There are two theories regarding when Kūkai received ordination (*tokudo*) – becoming an officially recognized monk by the government): the age-20 theory and the age-31 theory. I support the age-31 theory. Ordination requires a mentor priest, and the absence of one in Kūkai's obituary indicates that he was not ordained at age 20. Additionally, the *Sangō Shiiki*, written by Kūkai at age 24, expresses his determination to renounce worldly life, further indicating that he had not yet been ordained.

The four places known as training sites for Kūkai before he went to China are: Ōtakidake in Awa Province (present-day Tokushima Prefecture), Cape Muroto in Tosa Province (present-day Kochi Prefecture), “Kingan,” and “Sekihō” (Mount Ishizuchi) in present-day Ehime Prefecture. There are two theories regarding the identification of “Kingan”: one, that it is Mount Kinpū in Yamato Province (present-day Nara Prefecture) and two, that it is Kinzan Shusseki Temple in Iyo Province (Ehime). The former is more widely accepted. However, according to the preface of the *Sangō Shiiki*, Kūkai was taught the Kokuzō-Gumonji ritual by a monk, but the only training sites he mentions afterward are Ōtakidake and Cape Muroto. Furthermore, the second volume of the same work states that Kūkai lived in Sanuki Province (present-day Kagawa Prefecture) until he was 24 years old. Considering these facts, it is highly likely that “Kingan” was Kinzan Shusseki Temple.

In biographies of Kōbō Daishi from the mid-Heian period onward, Kūkai's ordination is said to have occurred at the age of 20, and his training sites prior to the Tang period are said to have been limited to Ōtakidake and Cape Muroto. This is because, from that time forward, Kūkai was deified and became legendary as “Kōbō Daishi.” Therefore, ordination at age 31 and training at “Kingan” and “Sekihō” were considered unsuitable for “Kōbō Daishi.”

はじめに

入唐前の空海については、佐伯直氏出身であること、15歳で伯父の阿刀大足に学問を学んだこと、18歳で大学に入ったこと、一沙門に虚空蔵求聞持法を呈示され、阿波国大滝嶽、土佐国室戸崎で修行したことなどが『三教指帰』序文や『続日本後紀』の卒伝から知られるが、それら以外のことはよくわかっていない。本稿では、大学に入学してから唐に渡るまでの空海について、師僧、修行地の二点を中心に検討を行っていきたい。

1. 師僧

表1は『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』にみえる僧の卒伝（個人の来歴を載せた記事）をまとめたものである⁽¹⁾。これによると、国史に卒伝が載せられるような比較的著名な僧は、⑤⑩のような例外を除けば⁽²⁾、師事した僧や入寺した寺院の名前がいずれも記されている。ところが、空海だけはそうしたも

表1 『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』にみえる僧の卒伝

	年月日	僧名	師僧	備考	出典
①	延暦23・5・18	善謝	理教	理教に就いて法相を学ぶ	『後紀』
②	弘仁2・6・6	勝悟	尊応	尊応の弟子となる	『後紀』
③	弘仁3・8・23	善議	道慈	道慈の入室	『後紀』
④	弘仁5・10・22	常楼	善珠	興福寺の善珠の弟子となる、膳大丘・土師乙勝に外伝を学ぶ	『後紀』
⑤	弘仁6・1・7	如宝	—	大唐の人（鑑真と共に来日）	『後紀』
⑥	弘仁6・9・4	常騰	—	興福寺に入る、のち西大寺に移住	『後紀』
⑦	天長10・10・20	円澄	最澄	比叡山に登り、最澄の弟子となる、延暦24年に得度受戒	『続後紀』
⑧	承和1・9・11	護命	万耀他	元興寺の万耀を依止とし、17歳で得度、同寺の勝虞に法相大乘を学ぶ	『続後紀』
⑨	承和2・3・25	空海	—	18歳で大学に入る、一沙門に聞持法を示され、大滝嶽・室戸崎で修行、31歳で得度	『続後紀』
⑩	承和5・11・30	慈朝	常騰	常騰の入室、西大寺に住む、法相宗、神護景雲4年に得度	『続後紀』
⑪	承和5・12・27	寿遠	安澄	安澄の入室、延暦の末に出家得度、三論に優れ、因明に詳しい	『続後紀』
⑫	承和8・12・26	守寵	護命	法相宗の護命の資流、延暦24年に得度具戒	『続後紀』
⑬	承和10・12・29	守印	勝虞	勝虞の門徒、延暦24年に年分具戒、法相・具舎に詳しい	『続後紀』
⑭	嘉祥1・8・24	明福	賢璟	賢璟の門徒、延暦10年に得度、興福寺に住む、唯識・法相に詳しい	『続後紀』
⑮	仁寿1・6・8	道雄	慈勝他	慈勝に師事し、唯識論を学ぶ、のち長歳に従い華嚴・因明を、空海に従い真言を学ぶ	『文徳』
⑯	仁寿2・12・20	素然	—	俗名は源明(嵯峨天皇の子)、嘉祥2年に参議となり(この時37歳)、翌年出家	『文徳』
⑰	仁寿3・9・9	延祥	護命	護命に師事、延暦7年に具足戒を受ける	『文徳』
⑱	斉衡2・9・23	長訓	玄隣	玄隣に師事、延暦年中に具足戒を受ける	『文徳』
⑲	斉衡3・9・3	実敏	玄叡他	玄叡に属し、また永忠に従い経論を学ぶ	『文徳』
⑳	天安2・8・10	光定	最澄	叡山に登り、止観院に住む、弘仁元年に得度、同3年に具足戒を受ける	『文徳』

のがみえないのである。空海の卒伝は異例のものといえよう。佐藤健太郎氏によれば(佐藤2014)、『続日本後紀』の僧の卒伝は、国史編纂の際に寺家が作成・提出し、朝廷がそれに修正を加えたものである。『日本後紀』『日本文徳天皇実録』も同様に考えてよいであろう。

そうすると、空海の場合だけ師僧⁽³⁾や入寺した寺院を朝廷が編纂時に削除したとは考えられないので、寺家が作成・提出したものにそうしたことは書かれていなかったことになる。そしてこのことは、入唐前の空海は特定の僧に師事したり、特定の寺院で学業にはげむことはなかったことを示すものであろう⁽⁴⁾。

ここで想起されるのが、『性霊集』巻4「少僧都を辞する表」の「空海、弱冠より知命に及ぶまで、山藪を宅とし、禪黙を心とす」、つまり、20歳(弱冠)から50歳(知命)まで山林修行中心の生活をしていたと空海が述べていることである。もちろん、空海の学識の深さから考えて、入唐前の空海が経典や教義の勉強

をどこかでしていたことは間違いないが（どこで勉強していたかは不明とせざるをえないが）、特定の僧や寺院に属することはなかったのであろう。

表1に師僧がみえないことは、空海が何歳で得度したのかという問題とも関係してくる。空海がいつ得度したのかについては、20歳説と31歳説（入唐直前説）の二つ⁽⁵⁾に大きく分けることができる（詳しくは武内2006、櫻木2007を参照されたい）。かつて宗門では20歳説がとられていたが、近年は31歳説が有力となっている。ところが、最近になって再び20歳説が主張されている。

私はどちらかといえば31歳説を支持したい。僧は得度すると度縁という身分証明書が与えられるが、そこには師主が署名することになっている（『延喜式』玄蕃寮度縁条）。たとえば、最澄の度縁では行表が、円珍の度縁では義真が師主となっている（『平安遺文』8-4281・4431）。師主は「得度する前からの師」（『訳注日本史料 延喜式 中』697頁）で、『令義解』僧尼令自還俗条には「衣止の師是なり、白衣たる時より、服事せる者なり、出家以後、業を受くこと、また同じなり」、『令集解』同条の古記には「寺内に於て親しく経教を承くを師主と為すべし」とある。表1にみえる師僧は師主あるいはそれに準じる者であろう。空海がもし20歳で得度していたならば、そうした師主や師僧がいたはずであり、記録に残って然るべきであろう。しかし、それがみえないのは、空海が20歳で得度していなかったことを示しているのではないだろうか⁽⁶⁾。

次に、空海が著した『三教指帰』をとりあげたい。『三教指帰』のなかで注目されるのは、序文の「遂に乃ち、朝市の栄華、念念に之を厭ひ、巖藪の煙霞、日夕に之を飢ふ、（中略）目に触れて我を勤む、誰か能く風を係がむ（こうして私は世俗の栄華を一念一念に厭うようになり、山林にたちこめるもやを朝夕に慕うようになった。（中略）吹く風をつなぎ止めることができないように、だれがこの出家の志を止めることができようか。）」、巻下末の「已に三界の縛を知りぬ、何ぞ纓簪を去てざらむ（今や三界の束縛の苦を知った。俗服を脱ぎ捨てて出家するがよい。）」という文言である⁽⁷⁾。これらはいずれも24歳の空海が出家の決意を述べたものと考えられ、空海がすでに得度していたとすると理解しにくい文章である。故に、『三教指帰』のこれらの文章からも、空海は20歳で得度していなかったといえよう⁽⁸⁾。

2. 四国と修行地

入唐前の空海が修行した場所として知られているのは、『三教指帰』序文にみえる阿波国大滝嶽と土佐国室戸崎、同巻下にみえる「金巖」と「石峯」（『髻髻指帰』に、「金巖」は「加禰能太気」、「石峯」は「伊志都知能太気」の注が付されている）の四ヶ所である。このうち大滝嶽、室戸崎、「石峯」の三ヶ所は現在の21番札所太龍寺付近、室戸岬、石鎚山と考えてまず間違いないが、問題は「金巖」である。「金巖」の比定地については、大和国の金峯山とする説と伊予国の金山出石寺とする説の二つがある（詳しくは大本2015を参照されたい）。

金峯山説は、『日本霊異記』中26・下1に「吉野金峯」、『万葉集』巻13-3293に「み吉野の 御金の嶽に間無くぞ 雨は降るとふ（後略）」とみえ、また、『令義解』僧尼令禪行条（僧尼が本寺を離れて山に籠もる際の届出の手続き等を規定する）に「もし山居金嶺に在らば、吉野郡と判下するの類なり」とあることなどを根拠とする。さらに『性霊集』巻9「紀伊国伊都郡高野の峯に於て入定の処を請け乞はせらるる表」には、「（前略）空海少年の日、好むで山水を涉覽せしに、吉野より南に行くこと一日、更に西に向ひて去ること兩日程、平原の幽地有り、名けて高野と曰ふ、（後略）」とあり、空海は「少年の日」に吉野周辺へ行っていることも金峯山説を補強するものである。

一方、金山出石寺説は、金山出石寺が中世末まで史料にみえないので、空海の時代に「金巖」が金山出石寺であったことを史料面から裏付けることは困難である。しかし、『三教指帰』にみえる四つの修行地のうち、「金巖」だけが四国外というのはやはり違和感がある。

『三教指帰』序文によれば、空海はある沙門から虚空蔵求聞持法を示されるのだが、その後修行した場所としてあげているのは阿波国大滝嶽、土佐国室戸崎の二つである。これは、当時の空海の修行地が四国であったことを表すものであろう。

また、『三教指帰』巻下では、空海に擬せられる仮名乞児が「然れども頃日の間、刹那、幻のごとく南閩浮提の陽谷、輪王所化の下、玉藻帰る所の嶋、櫛樟日を蔽すの浦に住み、未だ思ふ所に就かざるに、忽ちに三八の春秋を経るなり（しかしながら、近ごろのことをいえば、しばらくの間、幻のように南閩浮提（この

世界)の中の日出づる国日本の天皇の治下にある玉藻よる讃岐の島、楠が太陽をさえぎる多度の郡、屏風が浦(すなわち弘法大師空海の故郷)に住んでいる。思う人(仏)の所へもまだ行けないうちに、早くも二十四年を過ぎてしまった。)と述べている(『聳髻指帰』に、「南閩浮提の陽谷」は「日本」、「玉藻帰る所の嶋」は「賛岐」、「檣樟日を蔽すの浦」は「多度」の注が付されている)。ここで注目したいのが、「檣樟日を蔽すの浦」、すなわち讃岐国多度郡に「生まれ」ではなく「住み」とあること、つまり空海は24歳まで四国に居住したとしていることである。もちろん、空海は上京して大学に入っているのだから、ずっと四国にいたわけではないが、こうした表現がなされているのは、大学を去ったあと空海は四国に戻り、そこで修行をしていたからではないだろうか。

大本敬久氏は『三教指帰』が駢儷文で著されていることを重視し、伊予国石鎚山とされる「石峯」と並記される「金巖」が「石峯」と遠く離れてはいない四国の中の修行地であるとする方が妥当ではないかと考えるとする(大本2015)。支持したい見解である。

このように、近年は「金巖」を金峯山とする説が有力になっているようだが、金山出石寺説の可能性もまだ残されていると思われるのである。

3. その後の弘法大師伝における変容

空海の師僧、得度年齢、修行地についてみてきたが、これらはその後の弘法大師伝ではどのように記されているであろうか。

平安時代中後期に著された弘法大師伝としては、清寿の『弘法大師伝』(1002年成立)、経範の『大師御行状集記』(1089年成立)、聖賢の『高野大師御伝』(1118年成立)、藤原敦光『弘法大師行化記』(12世紀前半成立)、作者不詳の『弘法大師御伝』(1152年成立)などがある。それらによると空海が得度したのは20歳(『大師御行状集記』は19歳)、師僧は勤操、場所は和泉国槇尾山寺となっている。また、修行地はいずれも大滝嶽と室戸崎で、「金巖」と「石峯」はみえない。

では、このような変容がなぜ生じたかだが、それは平安時代中期以降空海が「弘法大師」として神格化、伝説化されるようになったためと考えられる。

空海は31歳の時に得度したと考えられるのだが、そうするとそれまで空海は私度僧だったことになる。当時、僧には租税免除などの特権が与えられていたので、僧になるためには得度、すなわち一定の試験を受け、それに合格する必要がある。こうした僧は官僧とも呼ばれ、いわば政府に認可された正式の僧であった。しかし、長年にわたり正式の僧ではなく単なる私度僧だったというのは、「弘法大師」としては好ましくないことである。そのため、得度年が早められ、20歳(あるいは19歳)の時に得度したことになるのではないだろうか。⁽⁹⁾

次に、大滝嶽と室戸崎だけが修行地となったことだが、『三教指帰』はそこでの修行の様子を「阿国大滝嶽に躋り攀ち、土州室戸崎に勤念す、谷響を惜しまず、明星来影す(阿波の国の大滝嶽によじ登り、土佐の国の室戸崎で一心不乱に修行した。谷はこだまを返し(修行の結果があらわれ)、(虚空蔵菩薩の化身である)明星が姿を現わした。)」と述べている。空海が熱心に修行した結果、こだまが返り、明星が姿を現わしたというのである。「弘法大師」にふさわしい修行の様子といえよう。

一方、「金巖」と「石峯」がみえるのは『三教指帰』巻下の冒頭、仮名乞児の様子が述べられている部分である。そこには空海に擬せられる仮名乞児の様子として「折頰とはなびせに高匡とまかぶらたかに、顛頤とおとがひほそに隅目とますみたり、鳴める口、鬚無くして孔雀の貝に似たり、欠けたる唇、齒疎かにして狡兎の唇の若し、偶市に入るときは瓦礫、雨のごとくに集り、若し津を過ぐるときは、馬屎、霧のごとくに来る(鼻筋がまがり、眼がくぼみ、おとがいは尖り、眼は角ばっている。ゆがんだ口に鬚がなくて子安貝のようであり、口は三つ口で歯が抜け、すばしこい兎の唇である。たまたまこの人が市場に入るときは瓦や小石が雨のように落ちてくるし、渡し場を通れば馬糞を投げられる。)」と記されている。「弘法大師」の姿としてはあまりふさわしくないものである。

「金巖」と「石峯」はそれに続いて「或るときは金巖に登って雪に遇うて坎墮たり、或るときは石峯に跨って糧を絶って輶軻たり、或るときは雲童の娘を眇て心懈むで思を服け、或るときは滸倍の尼を観て意を策して厭ひ離る(あるときは金の巖に登って雪に会って困りはて、あるときは伊予の石槌の巖に登って断食

して苦労した。あるときは住吉の魚婦を見て、心がゆるんで気になり、またあるときはこべの尼を見て、惹かれる気持を無理にすてた。)とみえている。この四つの文は冒頭にいずれも「或るときは」とあるので、一連のものとみなされる。そうすると仮名乞児は「金巖」や「石峯」で修行しつつも、その一方で女性に気をとられていたことになる。これも「弘法大師」としては好ましいことではない。

このように『三教指帰』巻下にみえる仮名乞児の姿や「金巖」、「石峯」での修行の様子にはやや問題があるといえよう。それに較べると、同序文の大滝嶽、室戸崎における修行の様子は「弘法大師」にふさわしいものである。「金巖」、「石峯」が修行地としてとりあげられなくなるのはこうしたことによるものではないだろうか。¹⁰⁰⁾

おわりに

本稿では、入唐前の空海は特定の僧や寺院には属してはいなかった、『三教指帰』にみえる「金巖」は伊予国の金山出石寺の可能性あることを述べた。また、平安時代中期以降、「弘法大師」として神格化、伝説化が進むなかで、得度した年齢や修行地がどのように変容するかを考えた。いずれも推測の域を出るものではないが、今後の研究に少しでも役立てば幸いである。

【註】

- (1)『日本後紀』は残存する10巻の卒伝のみ。
- (2)⑤の如法は鑑真とともに来日した唐人僧、⑩の素然は嵯峨天皇の子で、参議だった38歳の時に出家した僧である。
- (3)ここでは、師主を含めて教導にあたった僧を師僧と呼ぶことにする。
- (4)空海の卒伝に師僧がみえないのは、恵果が空海の唯一の師僧であることを示すためと考えられなくはない。しかし、当時の僧の卒伝には、一人ではなく複数の師に従った、さまざまな宗派の教えを学んだことがしばしば記されている(『日本文徳天皇実録』仁寿元年6月己酉条の道雄、『日本三代実録』貞観17年2月癸亥条の道昌、同元慶8年3月丁亥条の宗観など)。また、後述するように、後代になると勤操が空海の師僧としてみえるようになる。したがって、寺家側が恵果を意識してあえて師僧を書かなかったと考える必要はないであろう。
- (5)得度を19歳、30歳とする説もあるが、ここでは前者を20歳説、後者を30歳説に含めるものとする。
- (6)31歳で得度した場合でも師主は必要だが、入唐直前の延暦23年(804)(もしくは延暦22年)にあわただしく得度したとすると、師主も形式的だった可能性が高く、そのため記録に残らなかったのではないだろうか。
- (7)『三教指帰』の現代語訳は、弘法大師空海全集編輯委員会1984によった。
- (8)『聾瞽指帰』は空海が24歳の時(延暦16年)に著したものである。『三教指帰』と『聾瞽指帰』は序文と末尾の「十韻の詩」が異なるだけで、それら以外はほとんど同文である。こうしたことから、『三教指帰』は空海が後年に『聾瞽指帰』を改めたものとされている。故に、厳密に言えば、本文に掲げた序文や末尾の文言は24歳の空海が書いたものではないが、序文の最後に執筆年を『聾瞽指帰』と同じく延暦16年としているように、24歳の時の心境を綴ったものとみてよいであろう。
- (9)勤操や槇尾山寺が登場するのは、得度したとなると師主や寺院が必要になったためであろう。ただ、なぜ勤操、槇尾山寺なのかはわからない。
- (10)大滝嶽、室戸崎での修行は空海が『三教指帰』序文で自らのこととして書いているのに対し、「金巖」、「石峯」での修行はあくまで仮名乞児の行為として記されていることも、「金巖」と「石峯」に言及されなくなる要因の一つであろう。

〈参考文献〉

- 上山春平『空海』(朝日新聞社、1992年)
 愛媛県歴史文化博物館『平成26年度特別展図録 弘法大師空海展』(2014年)
 大本敬久「『三教指帰』と空海の修行地に関する基礎的考察—「金巖」伊予国説を中心に—」(『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』20、2015年)
 大本敬久「『三教指帰』に見る空海と四国」(『四国遍路と世界の巡礼』6、2021年)
 川崎庸之「空海の生涯と思想」(『日本思想大系 空海』岩波書店、1975年)

- 櫻木潤「空海の得度・受戒年次をめぐって—三十一歳説の再検討—」(『続日本紀研究』367、2007年)
- 櫻木潤「平安時代初期の得度・受戒制度—空海の「出家入唐」をめぐる二種の太政官符を中心に—」(『ヒストリア』208、2008年)
- 櫻木潤「入唐前の空海をめぐって—『御遺告廿五箇条』第十六条を中心に—」(『古代史の研究』18、2013年)
- 佐藤健太郎『『続日本後紀』掲載の僧侶の伝記について』(原田正俊編『日本古代中世の仏教と東アジア』関西大学出版部、2014年)
- 高木神元『空海—生涯とその周辺—』(吉川弘文館、1997年)
- 武内孝善『弘法大師空海の研究』(吉川弘文館、2006年)
- 武内孝善『空海はいかにして空海となったか』(KADOKAWA、2015年)
- 武内孝善「西本昌弘著『空海と弘仁皇帝の時代』に寄せて」(『古代文化』75-1、2023年)
- 東野治之「大和文華館所蔵の延暦二十四年太政官符」(同『日本古代史科学』岩波書店、2005年、初出は2000年)
- 西本昌弘「迎空海使としての遣唐判官高階遠成」(同『空海と弘仁皇帝の時代』塙書房、2020年、初出は2008年)
- 吉田一彦「古代の私度僧について」(同『日本古代社会と仏教』吉川弘文館、1995年、初出は1987年)
- 渡辺照宏・宮坂宥勝『沙門空海』(筑摩書房、1967年)
- 『日本古典文学大系 三教指帰 性霊集』(岩波書店、1965年)
- 弘法大師空海全集編輯委員会編『弘法大師空海全集』第6巻(筑摩書房、1984年)